

## メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一11:17~22 「ほめるわけにはいかない」

[17]「ところで、聞いていただくことがあります。私はあなたがたをほめません。あなたがたの集まりが益にならないで、かえって害になっているからです」

「聞いていただくことがあります」とは原文では「次のことを命じる」という意味。パウロはここで、使徒としての権威を持って命じると言っているのである。その理由は教会の集まりが益ではなく、かえって害になっているからであった。

[18]「まず第一に、あなたがたが教会の集まりをするとき、あなたがたの間には分裂があると聞いています。ある程度は、それを信じます」

この問題はすでに出てきた、誰を指導者として従うかという分裂ではなく、また新たな分裂である。しかし、「ある程度は…」ということばにパウロの配慮が感じられる。

[19]「というのは、あなたがたの中で本当の信者が明らかにされるためには、分派が起こるのもやむを得ないからです」

パウロは分裂や分派を勧めているのではないが、そのような生々しい事態の中で、本当の信者が明らかにされていくということを教えている。

[20-21]「しかし、そういうわけで、あなたがたはいっしょに集まっても、それは主の晩餐を食べるためではありません。食事のとき、めいめい我先にと自分の食事を済ませるので、空腹な者もおれば、酔っている者もいるというしまつです」

「主の晩餐」とは聖餐式のこと。当時、主の晩餐は夕食の後に行われていた。それは、主イエスが十字架につけられる前に、弟子たちと共に持たれた、エルサレムでの晩餐に由来すると考えられる。それで、主の晩餐にあずかるために教会に集まった人々は、まず自分たちのために食事をした。ユダの手紙12節ではこの食事は「愛餐」と言われている。それは、教会に集まった各自はそれぞれ自分の食事を持参したが、特に富める人々はたくさんの食物を持参し、貧しい人々に分け与えるという美しい行いのゆえにつけられた名前であった。ところがコリント教会においては、分かち合うどころか、めいめい我先にと自分の食事を済ませ、裕福な者は貧しい者をさげすみ、自らの食事に満ち足りて酔っており、貧しい者や奴隷は空腹のままであった。こうなるともうそれは聖く美しい主の晩餐どころか、自己中心主義者の饗宴、分裂、憎しみの場となり果てている。それゆえパウロの心はどれほど怒りと悲しみに満ちていたことであろう。自分が苦勞して開拓し立て上げた教会がこのありさまとは…。このようにコリント人たちは神の御名をはずかしめていた。

[22]「飲食のためなら、自分の家があるでしょう。それとも、あなたがたは、神の教会を軽んじ、貧しい人たちをはずかしめたいのですか。私はあなたがたに何と言ったらよいでしょう。ほめるべきでしょうか。このことに関しては、ほめるわけにはいきません」

パウロは公私を混同する富める者の態度に、教会本来の使命を見失っている姿を見ている。教会の集まりは、神を礼拝すること、また、信徒の交わりと活動が中心であり、それらは神のみことばの解きあかし、祈り、賛美、聖礼典の執行、聖い交わりを含む。それゆえこういった目的以外のことが教会内で行われていることをパウロは見のがすこと

ができないのである。今まで述べられてきた、信仰の弱い者、良心の弱い者と同様に、  
貧しい者もキリストにある交わりの中で貧富の差が影響力を持つてはならないのである。  
→ヤコブ 2 : 1 ~ 9